

りんご病害

1 予報（9月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
斑点落葉病	－	並	(1) 8月後半の巡回調査での発生園地率は平年よりやや低かった。 (－) (2) 9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い予報であり、発生に好適な条件。(＋)
褐斑病	－	多	(1) 8月後半の巡回調査での発生園地率は、平年よりやや高かった。 (＋) (2) 9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い予報であり、発生に好適な条件。(＋)
黒星病	－	多	(1) 8月後半の巡回調査での発生園地率は、平年より高かった。(＋) (2) 9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い予報であり、発生に好適な条件。(＋)
すす斑病 すす点病	－	やや多	(1) 9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い予報であり、発生に好適な条件。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－-)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- (1) 農薬を散布する際には、対象以外の品種に飛散しないように十分注意する。また、散布薬剤の選択にあたっては、農薬の収穫前日数に特に注意する。

【斑点落葉病】

- (1) 今後の降雨により発病の増加が懸念されるので、最終散布まで防除間隔が空かないようにするとともに、降雨前の防除を心がける。特に王林は秋期に多発しやすいので注意する。

【褐斑病】

- (1) 本病の発生が確認された場合は、速やかにトップジンM水和剤またはベンレート水和剤を特別散布する。
(2) 前年多発園（前年秋期に黄変落葉が目立った園地）で、本年、これまでに本病を対象とした特別散布を実施していない園地では、発生の有無にかかわらず、速やかに特別散布する。
(3) 定期的に園地をよく観察する。黄変葉や褐色の病斑葉が確認されたら、付近の葉を含めて観察する。本病であれば、病斑や病斑付近の緑色の部分に黒色虫糞状の粒々（分生子層）が必ず観察される（図1）。



図1 褐斑病の病斑（黒色虫糞状の粒々が特徴）

【黒星病】

- (1) 園地を見回り、発生が確認された場合は見つけ次第、発病葉や発病果を摘み取り、土中に埋めるなど適正に処分する（図2）。
- (2) 他病害との同時防除を兼ねて黒星病に効果のある予防剤を最終散布まで定期的に散布する。苗木など未結果樹での発生にも注意し、成木と同様に薬剤防除を徹底する。
- (3) 散布ムラがないように十分量を丁寧に散布する。降雨が予想される場合は、降雨前に散布する。



図2 黒星病の病斑（左：葉表の病斑、右：果実病斑）

【すす斑病、すす点病】

- (1) 中～晩生種を対象に9月上～中旬に本病に効果のある薬剤を1～2回特別散布する。中旬以降も気温が高い場合は、晩生種を対象にさらに追加散布する。早生種では本病を対象とした9月の防除は不要である。
- (2) 例年、発生が多い園地では、9月中旬（最終散布）の薬剤には、ストライド顆粒水和剤、オーソサイド水和剤80、アリエッティC水和剤を選択する。
- (3) 晩生種においては、半月の平均気温が18℃を下回ると感染が少なくなるので、この時期を最終散布の目安とする。また、最終散布まで散布間隔を空けないことが重要である。

【炭疽病】

- (1) 重要な二次感染源となる発病果は、見つけしだい摘み取り、園地外で処分する。

りんご虫害

1 予報（9月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
リンゴハダニ	－	やや多	(1) 8月後半の巡回調査での発生園地率は、平年よりやや高かった。(+) (2) 9月の気温は、平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件。(+)
ナミハダニ	－	並	(1) 8月後半の巡回調査での発生園地率は、平年よりやや低かった。(－) (2) 9月の気温は、平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件。(+)
果樹カメムシ類	－	並	(1) 8月の巡回調査での被害果発生園地率は、平年並であった。(±) (2) クサギカメムシの予察灯への誘殺数は、平年より少なかった。(－) (3) 9月の気温は、平年並か高い予報であり、活動に好適な条件。(+)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- (1) 農薬を散布する際には、対象以外の品種に飛散しないように十分注意する。また、散布薬剤の選択にあたっては、農薬の収穫前日数に特に注意する。

【ハダニ類】

- (1) 園地をよく観察し、発生が多い園地では、速やかに防除を行う。
- (2) 特にナミハダニは、9月中旬以降、越冬成虫（オレンジ色を呈する）が出現し薬剤が効きにくくなるので、防除は、越冬成虫が出現する前までに実施する。
- (3) 目通りでの発生が少なくても、薬剤のかかりにくい樹上部で多発している場合があるので、散布ムラの原因となる混み合った部位の不要な徒長枝は、適宜剪除するとともに、樹上部まで薬液がかかるよう十分量を丁寧に散布する。
- (4) 薬剤抵抗性ハダニ類の発現回避のため、同一薬剤は1シーズン1回の使用に限る。また、薬剤は、複数年を単位としたローテーションを厳守する。
- (5) コテツフロアブルはリンゴハダニに効果がないので、リンゴハダニの発生が目立つ園地での薬剤は、気門封鎖型を選択する。
- (6) 殺ダニ剤のダニオーテフロアブルは、銅剤との混用により効果の低下が懸念されるため、混用しない。また、近接散布による効果の低下を避けるため、ダニオーテフロアブルの散布から10日間は銅剤を散布せず、銅剤散布後は1か月間、ダニオーテフロアブルを散布しない。



図1 ハダニ類の被害葉



図2 リンゴハダニの成虫、卵



図3 ナミハダニの成虫、卵

【果樹カメムシ類】

- (1) 一般に9月以降の防除は不要であるが、飛来が多数確認された場合は、効果のある薬剤により防除を実施する。

【シンクイムシ類】

- (1) 被害果は採集し、3日以上水漬け処分する。
- (2) 秋期の気温が高い場合、スモモヒメシンクイの加害が長引くので、過去に被害が確認された園地では9月上旬に効果のある薬剤を散布する。



図4 シンクイムシ類の被害果（外観）

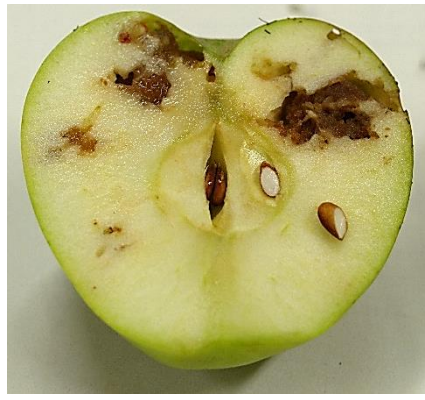


図5 シンクイムシ類の被害果（内部）